

聖霊降臨後第24主日特定28（11月19日の聖書箇所）

I 第一朗読（ゼファニヤ1章7・12―18節）

- 7 主なる神の御前に沈黙せよ。  
主の日は近づいている。  
主はいけにえを用意し  
呼び集められた者を屠るために聖別された。
- 12 そのときが来れば  
わたしはともし火をかざしてエルサレムを捜し  
酒のおりの上に凝り固まり、心の中で  
「主は幸いをも、災いをもくだされない」と  
言っている者を罰する。
- 13 彼らの財産は略奪され、家は荒れ果てる。  
彼らは家を建てても、住むことができず  
ぶどう畑を植えても  
その酒を飲むことができない。
- 14 主の大いなる日は近づいている。  
極めて速やかに近づいている。  
聞け、主の日にあがる声を。  
その日には、勇士も苦しみの叫びをあげる。
- 15 その日は憤りの日  
苦しみと悩みの日、荒廃と滅亡の日  
闇と暗黒の日、雲と濃霧の日である。
- 16 城壁に囲まれた町、城壁の角の高い塔に向かい  
角笛が鳴り、関の声があがる日である。
- 17 わたしは人々を苦しみに遭わせ  
目が見えない者のように歩かせる。  
彼らが主に対して罪を犯したからだ。  
彼らの血は塵のように  
はらわたは糞のようにまき散らされる。
- 18 金も銀も彼らを救い出すことはできない。  
主の憤りの日に  
地上はくまなく主の熱情の火に焼き尽くされる。  
主は恐るべき破滅を  
地上に住むすべての者に臨ませられる。

II 第二朗読（テサロニケの信徒への手紙1の5章1―10節）

1 兄弟たち、その時と時期についてあなたがたには書き記す必要はありません。2 盗人が夜や  
つて来るように、主の日は来るといふことを、あなたがた自身よく知っていますからです。3 人々  
が「無事だ。安全だ」と言っているそのやさきに、突然、破滅が襲うのです。ちょうど妊婦に産み  
の苦しみがやって来るのと同じで、決してそれから逃れられません。4 しかし、兄弟たち、あなた  
がたは暗闇の中にいるのではありません。ですから、主の日が、盗人のように突然あなたがたを襲  
うことはないのです。5 あなたがたはすべて光の子、昼の子だからです。わたしたちは、夜にも暗  
闇にも属していません。6 従って、ほかの人々のように眠っていないで、目を覚まし、身を慎んで  
いましょう。

Ⅲ福音 (マタイ25章14-15、19-29節)

14 「天の国はまた次のようにたとえられる。ある人が旅行に出かけるとき、僕たちを呼んで、自分の財産を預けた。15 それぞれの力に応じて、一人には五タラントン、一人には二タラントン、もう一人には一タラントンを預けて旅に出かけた。早速、

(16 五タラントン預かった者は出て行き、それで商売をして、ほかに五タラントンをもうけた。17 同じように、二タラントン預かった者も、ほかに二タラントンをもうけた。18 しかし、一タラントン預かった者は、出て行って穴を掘り、主人の金を隠しておいた。)

19 さて、かなり日がたつてから、僕たちの主人が帰って来て、彼らと清算を始めた。20 まず、五タラントン預かった者が進み出て、ほかの五タラントンを差し出して言った。『御主人様、五タラントンお預けになりましたが、御覧ください。ほかに五タラントンもうけました。』21 主人は言った。『忠実な良い僕だ。よくやった。お前は少しのものに忠実であつたから、多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ。』22 次に、二タラントン預かった者も進み出て言った。『御主人様、二タラントンお預けになりましたが、御覧ください。ほかに二タラントンもうけました。』23 主人は言った。『忠実な良い僕だ。よくやった。お前は少しのものに忠実であつたから、多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ。』24 ところで、一タラントン預かった者も進み出て言った。『御主人様、あなたは蒔かない所から刈り取り、散らさない所からかき集められる厳しい方だと知っていましたので、25 恐ろしくなり、出かけて行って、あなたのタラントンを地の中に隠しておきました。御覧ください。これがあなたのお金です。』26 主人は答えた。『怠け者の悪い僕だ。わたしが蒔かない所から刈り取り、散らさない所からかき集めることを知っていたのか。27 それなら、わたしの金を銀行に入れておくべきであつた。そうしておけば、帰つて来たとき、利息付きで返してもらえたのに。28 さあ、そのタラントンをこの男から取り上げて、十タラントン持っている者に与えよ。29 だれでも持っている人は更に与えられて豊かになるが、持っていない人は持っているものまでも取り上げられる。』

逐語的な訳

14 ように なぜなら ある人が 旅に出かける者が 呼んだ 自分の 僕たちを そして 渡した 彼らに 彼の財産を、 15 そして ある者に 与えた 五 タラントンを、 ある者に 二を、 ある者に 一を、 各人に 自分の力に従つて、 そして 旅に出かけた。 すぐに

16 行つて 五タラントンを受け取つた者は 働いた それらによつて そして 儲けた 他の 五を。

17 同様に 二の者は 儲けた 他の 二を。 18 だが一を受け取つた者は 立ち去つて 掘つた 地を そして 隠した 彼の主人の銀を。

19 だが多くの時間の後に 来る 主人が その僕たちの そして 勘定を清算する 彼らとの。

20 そして 近づいて 五タラントンを受け取つた者が 差し出した 他の 五 タラントンを 言いつつ 「主人よ、 五 タラントンを 私に あなたは渡した。 見よ、 他の 五 タラントンを 私に 儲けた。」

21 話した 彼に 彼の主人は、 「よくやった、 僕よ、 良いそして忠実な者よ、 少しのものに関して あなたはあつた 忠実で、 多くのものに対して あなたを 私は任命するだろう。 入りなさい あなたの主人の喜びの中へ。」

22 「だが」近づいて 二タラントンの者も 言った、 「主人よ、 二 タラントンを 私に あなたは渡した。 見よ、 他の 二 タラントンを 私に 儲けた。」

23 話した 彼に 彼の主人は、 「よくやった、 僕よ、 良いそして忠実な者よ、 少しのものに関して あなたはあつた 忠実で、 多くのものに対して あなたを 私は任命するだろう。 入りなさい あなたの主人の喜びの中へ。」

24 だが近づいて 「タラントンを受け取つている者も 言った、 「主人よ、 私は知つた あなたを 次のことを 厳しい あなたはある 人で、 収穫する者 あなたが蒔かなかつた所で、 そして 集める者 あなたがまき散らさなかつた所から、 25 そして 恐れて 立ち去つて、 私は隠した

あなたのタラントンを 地の中に。 見よ、 あなたは持つ あなたのものを。」

26 だが答えて 彼の主人は 言つた 彼に、 「悪い僕よ、 そして 怠惰な者よ、 あなたは知つていたのか 次のことを 私は収穫する 私が蒔かなかつた所で、 27 そして 私は集める 私がまき散らさなかつた所から、 28 そして 投資することを 私の銀を 銀行家たちに、 29 そして 来て 私は 取り戻せただろう 私のものを 利子と共に、 30 そして 与えなさい 持つている者に 十 タラントンを、 31 なぜなら持つている者皆に 与えられるだろう、 32 そして 有り余るだろう。

だが持たない者は 彼が持つものも 取り上げられるだろう 彼から、 30 そして 役たたずの 僕を 投げ出せ 外の闇の中へ。 31 そこには あるだろう 泣くことが、 32 そして 歯の軋みが、』

(30 この役に立たない僕を外の暗闇に追い出せ。そこで泣きわめいて歯ぎしりするだろう。』)

語句の解説

14節「天の国はまた次のようにたとえられる」。直訳「ように なぜなら」。「ように」は比較を表す構文に用いられる。例えば、「ヨナが三日三晩、大魚の腹の中にいたように、人の子も三日三晩、大地の中にいることになる」(マタ二二40)、あるいは、「偽善者たちが…するように」、自分の前でラッパを吹き鳴らしてはならない」(マタ六一)という具合である。しかし、この箇所では比較文の結びが欠けている(逐語的な訳を見よ)。今週の福音の直前では、「十人のおとめ」のたとえによって天の国のことが述べられているから、これに続く今週の福音も「天の国」に関するたとえにちがいない。だから、14節を直訳すると、「天の国は、ある人が旅に出かけるとき、僕たちを呼んで、自分の財産を預けたことのようにである」となる。▼「ある人が旅行に出かけるとき」。主人は僕に財産を託して旅に出てゆく。留守を僕に任せる主人は、二四45-51の「忠実な僕と悪い僕」にも登場するし、また、「十人のおとめ」のたとえでは、花婿の到着の遅れが述べられていた。どちらも、花婿や主人の「不在」を前提とするたとえだと言える。イエスの復活と再臨の間のことを考えているのだろうか。

15節「それぞれの力に応じて」。並行箇所のルカ一九11-27では、十人の僕は一ムナずつを渡されるが、ここでは各自の力に応じて、金額が異なる。一ムナは百日分の労賃だが、一タラントンは六千日分の労賃に相当する。ルカと比べると、マタイのたとえに登場する僕は巨額の資産を主人から任されたことになる。▼「早速」。直訳「すぐに」。原文の語順を考えると、この語は「出かけた」にかかっており、「すぐに旅に出かけた」と訳すこともできる。しかし、UBS(聖書協会世界連盟)のギリシア語本文は「すぐに」の前にピリオドを打っているから、この副詞は16節にかかって、「すぐに行つて…働いた」の意味になる。その時には、タラントンを預かった僕の迅速な行動が強調されていることになる。

16節「もうけた」。この動詞はギリシア語ではケルダイノーである。この語は新約聖書での使用回数は17回であり、最も多く使用するのはマタイの6回である(二六26、一八15、二五16・17・20・22)。マタイがこの語を用いる箇所は、ルカでも伝えられているが、ルカがこの語を用いるのは九25だけである(マタ一六26と並行)。この語を二番目に多く用いるのは一コリントであり、5回の用例がある。また、一コリ九19以下では「信じる者を獲得する」の意味で用いられている。

18節「穴を掘り」。直訳「地を掘った」。一タラントンを預かった者は地に埋めるのが最も安全な方法と考えたのであろう。当時の掟では、穴を掘って預かりものを隠した者は、それが盗まれても賠償する義務がなかった。

19節「かなり日がたつてから」。直訳「多くの時間の後に」。この表現は、マタイ福音書が書かれた時代になると、イエスの再臨の遅れが意識されたことを暗示しているかも知れない。「忠実な僕と悪い僕」と「十人のおとめ」のたとえと今週の福音は、今の時代を主人が不在であり、花婿が遅れている時期としており、イエスの復活と再臨の間のことにおいてどのような在り方が望まれているのか、それをテーマとしていると言えよう。

21節「忠実な良い僕だ」。直訳「僕よ、良いそして忠実な者よ」。並行箇所のルカ一九17には「良い僕だ」とあるだけである。ところで、マタイにとつては「良い」とは「忠実である」ことに他ならない。「忠実な」と訳したギリシア語はピストスである。この語は、「信頼できる・忠実な」の意味にも、「信頼する・信じる」の意味にもなる。預けられたタラントんと同額を儲けた二人の僕は、土にタラントンを埋めた僕とは異なり、「恐れて立ち去つて」(逐語的な訳を見よ)ということがない(25節)。その意味では、「忠実な僕」とは、主人を恐れず「信頼する僕」でもある。▼「主人と一緒に喜んでくれ」。直訳「あなたの主人の喜びの中へ」。この「喜び」は、「天の国」でメシアが開く「喜びの宴」を表しているだろう。「喜び」を意味するヘブライ語(アラマイ語)は「祭り・婚宴」をも意味する。また、この表現全体がルカの並行箇所にはないから、マタイはこの表現によって、直前の「十人のおとめ」のたとえ、特に、賢いおとめたちが花婿と一緒に婚宴の席に入ることに関連づけようとしているのかも知れない。

24節「一タラントンを預かった者」。直訳「一タラントンを受け取っている者」。「受け取っている者」は完了分詞だから、「受け取り、まだ持っていて、活用していない者」を意味にもなる。

①構成の解説。

19節の「だが多くの時間の後に、主人が来る」によって、18節以前と20節以降が結び合わされている。18節以前には会話文が用いられず、20節以降はほとんど会話文で描かれていることから、今週の福音は大きく二つに分けることができる。しかし、14―18節はさらに二つに分けることができるから、段落分けは三つになる。14―15節は、僕に財産を託す主人を描き、16―18節は、財産を託された僕の行動を述べている。

㊤第一段落 (14―15節)

14―15節にはキアスモスが見られる。

a 旅に出かける者が

b 渡した (パラデイドーミ)

b 与えた (デイドーミ)

a 旅に出かけた

パラデイドーミはデイドーミの強意形であり、根本的には「あるものを他の者の処理にゆだねる」を意味する。ここではキアズモによって、財産を渡す主人の僕に対する信頼の大きさを強調している。

㊤第二段落 (16―18節)

16―17節の「儲けた」二人の僕と18節の「隠した」僕が対比されている。18節冒頭の「だが」はその対比を表している。16節一行目の「それらによって」は「タラントンによって」の意味だから、儲けた僕は、「主人から渡されたタラントン」を用いて働く。しかし、立ち去って地を掘った僕は「主人の銀」を隠す。預かった財産は「主人のもの」と考える僕は、主人の財産を守るために地に隠すことを最善の方法と判断している。

㊤第三段落 (19―30節)

20―21節には五タラントンを受け取った者が、22―23節には二タラントンを受け取った者が登場する。二人は、金額の差はあるが、主人への報告は全く同じ言葉で行っている。20―22節には、第一段落と第二段落のキーワードである「渡した」と「儲けた」が含まれている。主人が信頼して「渡した」財産は、それを用いて「儲け」るべきものと二人は考え、そのように振る舞った。この二人に対する主人のねぎらいの言葉も全く同じである (21・23節)。二人の僕と主人の会話を、全く同じ表現で繰り返すことによって、儲けの金額の差は主人には問題ではないことが示されているのだらう。

24節冒頭の「だが」はこの二人の僕と、「恐れて、立ち去って、隠した」僕とを対比させている。この僕は主人が「時かなかった所で収穫し、まき散らさなかった所から集める者」と考えている。26節で主人はその見方を認めているが、主人の言葉には、24節の「厳しい人」は含まれていない。蒔くことまで僕に任せる主人の信頼を見誤った僕は、主人を「厳しい」と思い、「恐れ」ることになる。

②主人から財産を任された三人の僕のうち、二人はそれを使って働いて、儲けを得ましたが、もう一人は土に埋めてしまう。なぜこの僕は他の二人のように、働くことができなかったのでしょうか。それを考えてみよう。

主人は僕に財産を「渡し」、旅に出る。自分が留守の間、その財産をどのように運用すべきかという指示は何も与えずに財産を渡すほどに、この主人は僕を信頼している。三人の僕にはそれぞれ、異なる金額が渡される。それは、各人の「力に従って」、主人が判断した金額である。一タラントンは約十七年分の労賃に相当するから、五タラントンを任された僕は高額の資金を与えられたことになる。それほどの大金を僕の裁量に任せて旅に出るほど、主人は僕を信頼している。

五タラントンを渡された僕は、それを使って働き、さらに五タラントンを儲けた。二タラ

トンを任された僕も同じように、ニタラントンを儲ける。三人の中では、最も少ない一タラントンを渡された僕は、「彼の主人の銀を」地の中に隠してしまう。確かに、主人の財産を損なわないためには、地の中に埋めるのは最も安全な方法であろう。三人目の僕にとって、預かった財産は「主人のもの」だと見なししているから、「主人の財産」を守ることに強い関心をいだいている。

主人が戻った時、最初に主人の前に出た僕は、「五タラントンを私にあなたは渡した。…他の五タラントンを私は儲けた」と報告する(20節)。この僕は、主人が自分を信頼して、財産を「渡した」という事実によって行動してきた。「渡した」という主人の行為に、主人の信頼を見て取ることができた僕は「儲ける」ことができる。ニタラントンを任された僕も、まったく同じ言葉で自分の成果を主人に報告する(22節)。彼もまた主人の信頼を感じて、「儲けた」一人である。この二人に対する主人のねぎらいの言葉は、儲けた多寡に関係なく、まったく同じである(21・23節)。この主人は儲けた金額の差を問題にしていない。主人の信頼を信じた彼らは、主人にとって「忠実な(信頼できる)僕」なのである。

最後に、一タラントンを任された僕が主人の前に出て語った言葉には先の二人とは異なり、「あなたが渡した」がない。主人が自分を信頼して財産を「渡した」という事実を見落とした彼には、主人は「厳しい人」としか映らない。「恐れて」地に隠したことを告白する僕を、主人は「怠惰な者」と呼ぶ。「怠惰な」という語の元々の意味は「躊躇する・怯む」である。彼は、他の二人のように主人から信頼される者となれなかった。それは、主人を恐れて、信頼しなかつたからである。

イエスの復活と再臨の間を生きる教会は、「主人の喜び」(21・23節)と表現されるメシアの宴に入るために、働くことを勧められている。私たちが任された大きな財産を見て、怯むことなく働くことができるのは、私たちが信頼した主を信じるべきなのである。

### ③注目すべき言葉——「利益・儲け(ケルドス)」と「儲ける・得をする(ケルダイノー)」

名詞ケルドスは「利益・もうけ・得」の意味。新約聖書には3回の用例がある。投獄されたパウロは、生きるにせよ死ぬにせよ自分の身によってキリストが公然とあがめられるようになることを切望していると言い、「私にとつて生きるとはキリストであり、死ぬことは利益である」と述べる(フィリ1・21)。パウロは、律法に熱心なヘブライ人としての生き方を「有利なこと」ではなく、キリストのゆえに損失と見なすようになった(三・7)。テトスへの手紙は、「恥ずべき利益」を得るために教える人々を戒めるように、テトスに命じる(テト1・11)。

動詞ケルダイノーは「儲ける・得をする」を意味し、新約聖書には17回の用例がある。

②文字通りの用法。イエスの弟子にふさわしい生き方とは、自分自身を捨ててイエスに従うことであり、「全世界を手に入れる」ことではない(マコ八・36並行)。ヤコブの手紙は、「今日か明日、これこれの町へ行つて一年間滞在し、商売をして金もうけをしよう」と言う人々を戒め、主の御心に基づいて生きるようにと勧告する(ヤコ四・13以下)。今週の福音では、主人から財産を預かった僕たちのうち、二人が主人の留守中に財産を運用して「もうける」(16・17・20・22節)。

①転義した用法。ある人が自分に罪を犯した兄弟に二人だけのところで忠告し、彼が言うことを聞き入れたなら、その人は兄弟を「得たことになる」(マタ一八・15)。1コリ九・19以下の用例は、パウロが福音宣教によってキリスト信者を得ることを表している。パウロはキリストを「得る」ため、キリストの内にいる者と認められるために、キリストのゆえに失ったすべてのものを塵あくたと見なししている(フィリ三・8)。ペトロの手紙は、妻たちに夫への従順を命じるが、それは「夫が御言葉を信じない人であっても、妻の無言の行いによって信仰に導かれるようになるため」である(1ペト三・1)。

③消極的な意味で、「損失を免れる・不利益を避ける」ことを表す(使二七・21)。